

第七回「宮古島文学賞」選考評

椎名 誠

かなりレベルの高い作品群

島をベースにし、島の心を描くという全国でもまれなこの賞も、回を重ねるにつれて様々に充実し、読み応えのある作品が増えてきたように思った。応募作品の総数は始めた頃よりは減ってきたが、それだけ内容が深まったように思った。初期の頃の“島”というテーマに対して、宮古島そのものを真正直に持ってくるという作品は減り、島というものの概念をそれぞれの人生に踏まえて小説世界を構成するという、内容的に数歩も進み高まった作品が多く集まった。

最終選考に残ったものから我々選考委員がそれぞれの見方で作品論議をした。私自身が最終選考に残った8編を採点して提出したが、何編かは他の先生が推挙するものと合致し、見方の精度が高まった気がした。そして最終的にここに書かれた3編が選ばれた。

一席を獲得した「水平線」は、満票だった。

このような枚数の短編小説だから、主人公として全体を語る作者の島に対する思いや行動は、島を知る読者にとっては明快に見えてくる風景や人間模様となっているだろう。

主人公はいくつもの深刻な内面の問題を抱えながら島の様々な立場、境遇の人たちとの交流を語る。それぞれが重要な人生の問題を抱えているようだが、島の空気がそれらに対して共通に流れ、話は起伏を帯びながらも穏やかに進んでいく。最後に海のかなたのニライカナイに結実していくあたりが小説としての安定感を得ている。

二席の「爆ぜる。」は、まだ二十代の都会のまぶしい昼とほりにけぶった夜の気配を混ぜたような荒っぽい背景を引きずっている。

青年の口からその周辺にからむ人々、世代に広がる社会が荒々しく紡がれて、のんびりした島の世界と相反するような世界を舞台にしている。文章も巧みに荒々しい気配を横溢し

て、ときに捨て鉢な狂気をはらんでいるようだ。一見したのんびりした風土を背景にした小説が他にたくさんある中で、この短編はアンフォーマルな荒々しさの言葉のつむぎが独特の小説世界を作り出し一気に読ませていく。主人公のいらつきと島の持つ柔らかで安定した空気と複雑に反発しあっているような座りの悪さが魅力に思えた。

「夏の消印」はその島独特の穏やかな気配や空気の広がりや全編に漂わせた島の魅力や存分に横溢させている筆致が心地いい。珍しいですます調で基本がモノローグで進められる話の展開も穏やかな気配を絶やさないが、読み進めていくうちにやはり小説としてのサスペンフルな起伏がゴツゴツあふれてきて、それらを収束させるエンディングも見事だった。

今回はこの他にもすぐれた作品が出そろった。病気や離婚や複雑な問題を抱えた主人公や登場人物がたくさん出がちなこうした短編

小説の中では、出色と言っているいい明るく奔放なたくさんの登場人物があやなす希望的な展開が横溢する「北緯三十度より南」という作品を私は本賞のもっと上位にすべきと思っていた。「白い島」も見逃せない軽快なテンポで話が進められ、この作者はたくさんの作品をこれから書ける人だろうと期待した。

ただしこの作品に限らずこうした短編小説のタイトル付けをみなさんもっと気を使った方がよいと思った。例えば今の「白い島」などはタイトルがあまりにも大きすぎ、茫漠としてつかみどころがない。いっそ本作品の中に出てくる『生意気なマンガ』という表現が気の利いた短編小説のタイトルになるような気がした。